

作物名：トマト

病害虫名：茎えそ細菌病（病原：*Pseudomonas corrugata*）



茎のえそ条斑と不定根



茎の維管束褐変



茎の髓部の空洞化

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・本病は生育後期の収穫期前後の多く発生が認められ、発病が著しい場合には枯死にいたることもあるが、軽度の場合は、罹病していることに気づかないままなんとなく全体が衰弱した株として残ることも多い。
- ・初期症状は、上位葉の軽度の黄化と萎凋が認められ、やがて、茎、葉柄、花梗の表面に黒色のえそ条斑を生じるが、根、葉身、果実などにはえそは認められない。
- ・外部にえそ条斑がみられない場合でも、茎内部を切断してみると、かなり上部まで維管束が褐変している。特に髓部は激しく褐変し、やがて腐敗し空洞化する。
- ・罹病株の茎には不定根の形成が随所にみられ、その内部が空洞化している場合が多い。
- ・萎凋症状を示す他の病害として、根に褐変がないことで萎凋病と区別できる。また、青枯病は全身が急激に萎凋し、葉の黄化が認められないことから本病と区別できる。
- ・茎の髓部が空洞化する他の病害としてかいよう病があるが、本病の場合は空洞部分に隔膜のような仕切りがある点で区別できる。
- ・茎を切断し、水に挿すとわずかに細菌泥の漏出がみられることもあるが、青枯病ほど顕著でない。

2 伝染源及び伝染方法

- ・第一次伝染源は明らかにされていないが、土壌伝染や種子伝染の可能性が指摘されている。
- ・他の細菌病と同様に発病植物の残渣中で生き残ることも考えられる。
- ・発病した株からは、芽かき作業などに使用したハサミや手指によって二次伝染すると考えられる。

3 発病・伝染好適条件

- ・本菌は細菌の一種で、シュードモナス属に属するが、蛍光色素を産生しない。
- ・本病は比較的低温期に発生することが多く、多湿条件で助長される。
- ・露地栽培では梅雨期（6～7月）、施設栽培では梅雨期（6～7月）及び低温期（10月～3月）に発生が多くなる。

4 防除方法

- ・本病は登録薬剤がなく耕種的防除が主体となる。
- ・多湿条件は発病に好適なので、施設内が多湿にならないよう換気を行う。
- ・曇雨天時などの管理作業は二次伝染と発病を助長するので、芽かき作業などは晴天時に行う。
- ・発生が認められたほ場では、管理作業時に使用するハサミや手は一定の間隔でケミクロンG（次亜塩素酸カルシウム溶液）や消毒用アルコールで消毒する。

5 出典

- （1）参考文献：日本植物病害大辞典（全農教）、農業総覧原色病害虫診断防除編2-①（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編2（農文協）
- （2）写真：宮城県病害虫防除所撮影